わが国の綿作の始まりと綿の栽培法

わが国における綿作は、廷暦18（799）年に、三河の国に漂着した天竺（インド）の青年が綿の種をもたらしたことに始まるといわれているが、この時は綿の品種の栽培が日本の気候に合わず、90年ほどで絶えてしまった。その後、明応から永正年間（1492～1520年）に、中国や朝鮮より日本の風土に適した綿種が伝来し、16世紀後半になると本格的に綿の栽培がおこなわれるようになった。

江戸時代・元禄年間（1688～1704年）を過ぎた頃に、最初に綿花の大産地となったのは綿作に適した土壌や気候の畿内や伊勢・三河であった。

『綿圃要務（めんぽようむ）』にみる綿の栽培法

天保4（1833）年に出版された大蔵永常著『諸国綿のつくりかたを委しく記したる書　綿圃要務』によれば綿の栽培方法の要点は以下のとおりである。

・綿を栽培する土地：綿の栽培に適した土地は、砂壌土で碁石のような小石がある肥沃の程度が中等で、肥をやり手入れをするのがよい。肥沃な土地では茎と葉だけが成長し、実の付き方が少なくなり、また実が多く付き過ぎても実が落ちることになるためである。いかなる土地でも常に水はけがよく、日照りの時でも水の便があるとよい。

・種の準備と蒔き方：種は水で藁灰を溶いたものにまぶすか、小便で藁灰か普通の灰を溶き、種をまぶし、よくもみ合わす。よくもみ合わすことにより数珠つなぎになっている綿の種が一粒ずつに分かれ、蒔きやすくなる。また、綿は八十八夜の前後に畑又は水はけのよい田に、一反（約1,000㎡）当たり普通の種の場合は一貫五百匁（約5.6kg）、良質の種の時は五百匁（約1.9kg）の種を蒔く。田に蒔く場合は、一、二年綿を作った後に、稲を作れば豊作になることが多い。

・施肥：①棒肥、二葉に生え揃った時に、棒で綿の根元に深さ1～2寸（3～6cm）ほどの穴をあけ、そこに干鰯を入れる。

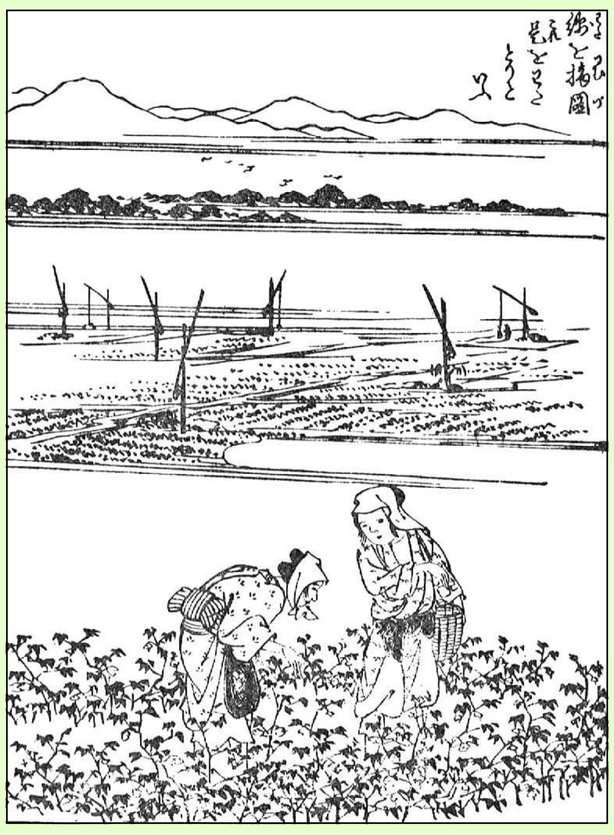
②水肥、棒肥の14・5日後に、水肥を施す。水肥は当初は小便1に対し水4を加えたものとし、綿の成長に従い小便1に対し水3を加えたものを数度施す。粉にした肥料は効果がない。

③送り肥、その後、追肥として油粕か干鰯を施す。

・綿摘み：綿は、晴天の日に良く乾燥したものを摘み取る。

種の準備と蒔き方

施　肥



綿摘み

出典：大蔵永常著『諸国綿のつくりかたを委しく記したる書　綿圃要務』